

文化・芸術

《名画の扉》

大川美術館企画展「20世紀アートセレクションー
ベン・シャーンとアメリカン・シーンを中心に」から

展示風景



ベン・シャーン（1898～1969年）は、リトアニアのユダヤ系の家に生まれ、1907年7歳のときに米国へ移住。初等教育を終え、石版画工房に徒弟として入ったシャーンは、夜間学校に通いながら仕事と勉強を両立させました。30年代に冤罪（えんざい）問題の「ドレフュス事件」などを扱った作品を発表し、社会派の画家として頭角を現していきました。

人生に不安を抱えた20代の終わり、シャーンは一つの小説に出会います。そして40年余

り経た70歳、死の1年前にして小説から一節を引用し、版画集「一行の詩のためには」リルケ『マルテの手記』より」として制作。リトクラフの大画面の本作は、震えるような描線と余白を十分に用いながら人の生の追憶のように展開します。

「それら思い出の真ん中に思い出の陰からぼっかり生まれてくる」という「一篇の詩の最初の言葉」、詩画集の最後に添えられたペンを握る手の画面は静かに、しかし力強く語り掛けてきます。

（大谷）